

施光恒『英語化は愚民化：日本の国力が地に落ちる』（集英社新書、2015年7月22日出版）

東, 英寿
九州大学大学院比較社会文化研究院

<https://hdl.handle.net/2324/2348782>

出版情報：九州大学地球社会統合科学府&附属図書館コラボトークイベント「学際的な読書の深みへ：ワクワクの森へご招待」, 2019-10-09

バージョン：

権利関係：

—学際的な読書の深みへ：ワクワクの森へご招待—

施光恒『英語化は愚民化 日本が国力が地に落ちる』
(集英社新書、2015年7月22日出版)

<ナビゲーター>

九州大学大学院比較社会文化研究院

東 英寿 (HIGASHI HIDETOSHI)

2019年10月9日



九州大学

2015年7月26日にFBに書いた書評(一部修正) 東 英寿

実に爽快かつ痛快な読後感。これぞ待ち望んでいた本の出現。昨今、猫も杓子も英語化、英語化ということに対して、本当にそれは問題ないのかと疑問を抱いていたが、その結論を理論的に見事に打ち出してくれたのが本書。九州大学でも英語での授業を担当せねばならず、中国文学を専門としている私は「日本人の私が英語で中国文学(中国語)を教えるのは変ではないですか」と教授会で訴えたが、この本は私のような脆弱な反論を遙かに超越し、大谷翔平のような160キロを越える剛速球で昨今の英語化をなぎ倒す力感あふれる大作。

まず、中世ヨーロッパに即して、英語化の弊害を分析。さらに、近代化を進めた明治日本においても、英語公用化を推し進めた森有礼に対して、**福沢諭吉**は痛烈な批判をしているし、**夏目漱石**は当時の学生の英語力の低下は、日本の教育が正当に発展した結果で当然のことだと断言していると指摘する。たとえば「社会」、「近代」、「経済」等の単語は、いずれも明治初期に生まれたものであり、それ以前には全く存在していなかった。明治時代に、こうした単語や概念を生み出したことにより日本語は格段に進歩し、漱石が言うように、英語ではなく日本語によって理解できるようになり英語は必要なくなった。**英語が不要なのは、日本の教育の正当な発展の結果だと漱石は断言する。**また、昨今の自然科学分野で日本人のノーベル賞の受賞者は続出する一方で、英語化が進んでいる韓国やインドでは、自然科学の水準は日本よりかなり遅れている。ここに、**母国語で専門書が読める日本の優位性があるわけで、インドでは近年、大学教育を英語ではなく、母国語ですべきだという議論が高まっているらしい。**

日本語の「タタミゼ」効果も見逃せない。「タタミゼ」効果とは、海外の日本語学習者の間では、日本語を学ぶと「性格が穏和になる」とか「人との接し方が柔らかくなる」という、日本語が学習者に与える影響のことであり、それは日本の「おもいやり」、「気配り」、「譲り合い」等の道德観の形成にも繋がっている。たとえば、英語の一人称はどんな場合でも“I”(アイ)、これは自分が常に世界の中心に揺るぎなく存在していることを表すが、これに対して日本語では「私、俺、僕、自分、わし、小生、手前」など、状況に応じて適宜使い分け、そこに日本語が生み出す物の見方や思想が含有されているわけで、英語化によって日本のこうした道德観が壊されていく。英語化は英語国(アメリカやイギリス)に多大な利権をもたらす、たとえばTOEFLの活用は、アメリカの民間団体に多大な利益をもたらす等々、様々なあらゆる角度から、これでもかという程の英語化の問題点を本書は浮き彫りにする。

著者は、昨今の英語化の主張は「一部のビジネス上のエリートや投資家をより裕福にすることをよしとする新自由主義的な発想のもとに押し進められている」と看破しており、英語化は今後ますます日本社会に格差をもたらし、英語化政策で、英語国の植民地になってしまうと言う。大喝采を送りたい。著者は「母語での思考こそ、創造性の源泉である。結果的に、大学の授業の英語化は、日本の大学の国際競争力の強化どころか、日本の学術文化の著しい衰退を招くことにつながる」と主張する。これを、私が教授会で言えば良かったのである。

26頁

英語のみで授業を行うことが「世界最高水準の教育への道」であるならば、当然、これらの国の大学の教育。研究の水準は世界最高水準であるはずだ。しかし、実際は違う。日本の大学よりも、こうしたアジアやアメリカの大学の研究水準のほうが優れているなどという事実はない。

44頁

小中学校での英語教育偏重、大学の授業の英語化、企業の英語公用語化などの現在の日本の動きは「これからはグローバル化の時代だ。グローバル化の時代は英語が標準語だ。だから日本語ではなくて英語だ」という見方、つまり「英語化史観」に強く影響されている

50頁

宗教改革のなかで、ラテン語の聖書を各地の「土着語」に翻訳するという運動が生じたのだ。ルターはドイツ語に、ティンダルは英語に、そしてカルヴァンの従兄弟であるオリヴェタンはフランス語に、それぞれ聖書を翻訳している。

53頁

「普遍語」で書かれた聖書を「土着語」に翻訳するという知的な営みは、ヨーロッパの言語が「土着語」から「国語」へと発展する契機

61頁

翻訳先の言語の文化は、翻訳元の文化と言わば知的対決を行うことになり、そのなかで自己認識を獲得し、深め、活性化されていくと指摘する。

6 3 頁

創造性をもたらす要因についてはさまざまな議論があるが、母語のもたらす感覚との密接な繋がりは否定できない。新しく何か（理論でも、文学作品でも、あるいは製品でも）を作り出す時は、必ず、新しい「ひらめき」や「カン」「既存のものへの違和感」といった漠然とした感覚（暗黙知）を、試行錯誤的に言語化していくプロセスが求められる。このプロセスを「土着語」（母語）以外の言語で円滑に進めることは、ほぼ不可能だ。

6 5 頁

グローバル化の流れでのなかで日本のような非英語圏で「国語」の「現地語化」が進めば、宗教改革以前の社会のように「普遍語」（現在は英語）を話す特権階級と、各地の「現地語」を話す一般の人々との間の知的格差が復活し拡大することになる。

「グローバル化史観」「英語化史観」の行き着く先とは、ごく一握りのエリートが経済的にも知的にも特権を握り、それ以外の大多数の人々は、社会の中心から締め出され、自信を喪失してしまう世界にほかならない。

6 6 頁

日本の社会が英語化してしまえば、多くの人が社会の重要な場から締め出され、知的成長の機会を奪われ、愚民化してしまうに違いないのだ。

68頁

森有礼

これからの日本が世界に負けない国づくりをするには、英語を重視しなければならない。初等教育から学校では英語を教授(使用)言語とし、政府機関で用いられる言語も英語にすべきである。

76頁

福沢諭吉

95頁

夏目漱石

93頁

一つ間違えば、国の独立の維持すら危うかった明治の日本は、英語の公用語化論を退け、日本語による近代化を選んだことで、危機の時代を乗り切った。

96頁

大学の授業の英語化に血道を上げる現在の英語化推進派の面々は、漱石のような真っ当な感覚を持ち合わせていないようだ。独立国家の国民たる矜恃も、母語で深く思考し、学問することの意義や喜びも、実感したことがないのだろう。



112頁

ヘイトスピーチ

113頁

言語の分断が格差を生み出す

150頁

オール・イングリッシュ方式とは、「英語を教える時は、英語のみで教える」という原則である。数年前から、オール・イングリッシュ方式の原則にのっとり、中学・高校の英語の授業は、日本語を使わず、英語のみで行うということを安倍政権の英語教育案ではうたっている。

147頁

若者たちに英語を学ばせる第一の目的は、学ぶ者自身の利益ではなく、資本を持ち込んでくれる海外投資家がビジネスを展開しやすい環境を作ることなのだ。

151頁

さらに言えば、英語教育学の研究者のなかでは、「英語は英語のみで教えるほうが効果が高い」という説は、学術的に正しくないという意見がかなりある。

154頁

TOEFLという利権

⇒大学入学共通テスト英語民間検定試験



157頁

新自由主義の思想はそもそも、各々の国の歴史や文化、発展段階などを考慮に入れない。世界を単一のグローバル市場にまとめ、そのなかで一部の投資家や経営者が自分の利益を最大化することを、正当な行為として扱う。そこでは言語や文化の相違は、資本や人材の移動の「障壁」としか見られない。そして現状で最も有力な言語である英語を用い、英語国の商習慣や文化に他の地域も合わせるべきだとする強い力を生んでしまう。



164頁

日本語には自分自身を指す語は、「私、俺、僕、自分、わし、手前、小生」

英語の一人称は、どんな場合でも常に“I”だ。これは、英語の世界観では、常に自分が出発点

171頁

以上見てきたように、言語は単なるツール(道具)ではなく、人々の自己意識のあり方、道徳の見方にまで影響を及ぼす。「言語はツールに過ぎない」という浅薄な見方に立ち、英語化を推し進めれば、いくつもの予想だにできなかった望ましくない帰結がもたらされる

188頁

子供たちが母語である日本語や日本文化を、英語や英語文化よりも、価値の低い、劣ったものだと考えてしまうのではないか

179頁

大学の自然科学系の授業の英語化は、インドや韓国などの国々のほうがはるかに先行している。だが、これらの国の自然科学の研究水準は日本よりもかなり遅れているようだ。英語化すれば学問の水準が上がり、創造性や研究開発力が増すというのは幻想に過ぎない

180頁

母語での思考こそ、創造性の源泉である。結果的に、大学の授業の英語化は、日本の大学の国際競争力の強化どころか、日本の学術文化の著しい衰退を招くことにつながる

219頁

日本人が母語でない英語で、英語を母語とするアメリカなどの英語圏の人々と各分野で本気で勝負したとしても、勝てる者はほとんどいない。→バイリンガル

234頁

言語の例をとれば、日本の大学が授業を英語化したり、企業が英語を公用語にしたりしても他国の役にはほとんど立たない。尊敬されることもない。むしろ、日本の学生の専門知識のレベルや学術研究のレベルが低下し、企業の業績も落ちるゆえ、冷笑をもって迎えられる

236頁

日本が本当に目指すべきは、日本人の英語強化ではない。目指すべきは、非英語圏の人々が、安心して日本人と同じくらい英語が下手でいられる世界の実現である。

日本人が英語下手なので、日本では日本語による近代化に成功し、日本語だけで何不自由なく生きていけるからである。

242頁

日本のエリートも最近、変質しつつある。「法人税を下げなければ、本社を外国に移すぞ」と政府を恫喝する大企業の幹部、・・・「優秀な留学生を呼んでくるために、うちは授業をすべて英語でやっている」と**国語に対する裏切りを誇らしげに言う大学教員**、そうした奇妙なエリートが日本にも出現しつつある。

244頁

三木谷浩史氏が公用語を英語に定め、経済成長を果たしたシンガポールを成功モデルとしてほめそやし、日本もその道を進むべきだと発言していることを紹介したが、**三木谷氏をはじめ、グローバル化・英語化推進派の人々は「言語はツールに過ぎない」と思い込んでいるからか、言語と、文化や社会、政治とのつながりを理解していない。**

ナビゲーター（関連話題） 1

言語とは？

○中国の少数民族⇒55

民族の意識→自らの言語を話す

* 言語と文化は分かちがたい。

* 私たちは気づかないうちに、言語が規定する文化や価値の枠内で行動し考えている。

言語の持つ違い

○日本語を中国語（普通語）に訳すと⇒3分の2

○英語の場合

ナビゲーター（関連話題） 2

母語

1 中国語⇒13億

2 スペイン語⇒4億7千万

3 英語⇒4億

▪

▪

10 日本語⇒1億1千万

バイリンガル

8歳までが勝負⇒生活環境、経済状態。

* 自分がどういう環境に生まれるか→自分ではどうにもならない。

バイリンガル（澤口俊之『幼児教育と脳』）

- **初期マルチリンガル**→言語的知性の感受性期（生後から8歳頃まで）に複数のネイティブ言語の環境に育ち習得した人（→**真のマルチリンガル**）。
- **後期マルチリンガル**→8歳を過ぎてから母国語以外の言語を習得した人。

○**初期マルチリンガル**→ブローカー野（人の脳の領域の一部で、**運動性言語中枢**とも呼ばれ、**言語処理**や**音声言語**等に関連する）が区画化されて、「日本語用区画」、「英語用区画」のような区画がはっきりとできる。→各々の言語は、区画ごとに処理されるので、神経回路における混乱、混線は起こらない。スムーズな処理。（→**真のマルチリンガル**）

○**後期マルチリンガル**→区画化は起こらない。母国語用の区画で複数の言語を処理→混乱してしまうことがあり、いかに努力しても決して真のマルチリンガルにはなれない。